

2012年冬鳥ウォッチ報告 — 今冬は冬鳥の当たり年だった！！

バードリサーチ

サクラの季節もあっという間に過ぎ、野山には夏鳥たちの囀りが聞かれるようになってきました。冬鳥たちの多くも越冬地をあとに、故郷へ帰っていきました。2012年の秋は10月ごろからアトリやマヒワの情報が届き、冬鳥たちの当たり年の予感がしました。はたして2012年冬（以下今冬）のアトリやマヒワ、カワラヒワなどの冬鳥ウォッチ対象種の生息状況はどのようなものだったのでしょうか。以下に、4月1日までに届いた情報を基に今冬の冬鳥ウォッチの結果を報告いたします。

記録件数

今冬は、4月1日までに北海道から九州までの43名の方から合計124調査地、合計211件（6種の記録件数の合計）の情報をいただきました（図1）。この数字は、冬鳥ウォッチを開始して以来の過去最多件数となりました。調査地の地域的な分布は、今冬も関東地方がもっとも多く、全体の40.3%（50件）を占めていました（図2）。今冬ではさらに中国地方や四国地方、九州地方からも情報が提供され、3地域を合わせると41件（全体の33%）となりました。その一方で近畿地方や東海地方、東北地方、北海道の調査地はあまり多くありませんでした。やはり、東北地方や北海道では冬の寒さが厳しく積雪も多いことから、なかなか冬鳥を定期的に観察するのは困難なのかもしれません。さらに、北海道などでは越冬する個体自体が少ないのかもしれません。そのため、北海道の方からは調査期間中に調査対象種をまったく観察できなかったという情報をいただきました。積雪地方では、調査開始時期を少し早めたり、3月中旬ごろまで延長するなどの修正も必要かもしれません。

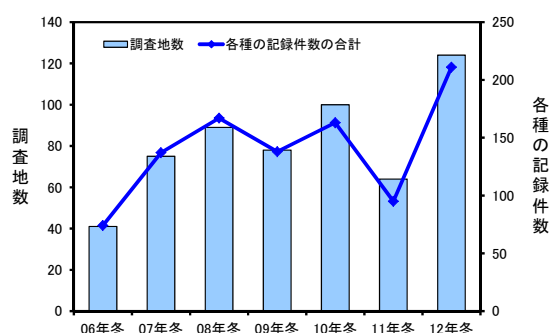


図1. 調査地数と各種の記録件数の推移

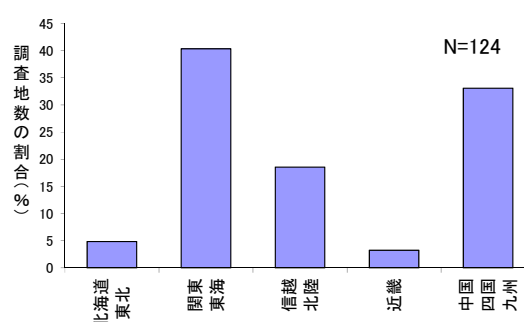


図2. 大まかな地域別の調査地数

記録種および記録状況

今冬は、調査対象種の6種すべてが記録されました。記録件数こそ少ないものの、イスカも2008年以来4年ぶりに記録されました。記録件数が最も多かったのは例年通りカワラヒワ（63件）でしたが、次いでマヒワ（52件）、アトリ（42件）、カシラダカ（35件）、ハ

ギマシコ（16件），イスカ（3件）の順でした。マヒワは2010年冬の56件に次いで2番目に多く情報が寄せられました。昨冬はわずか4件だけでしたので，その違いに驚かされます（図3）。また，アトリは2008年冬の40件を抜いて過去最多件数を記録しました。以下に，各種の記録状況を少し詳しく紹介いたします。

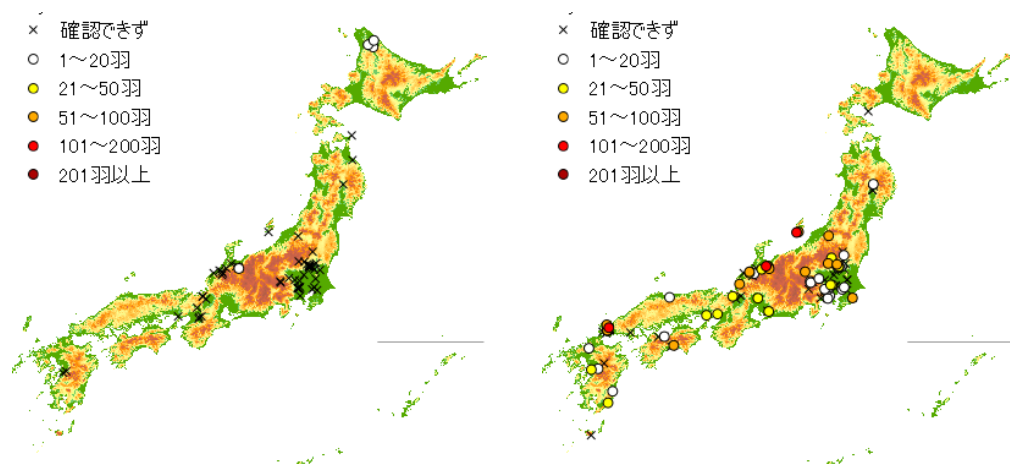


図3. 2011年度のマヒワの記録状況（左）と2012年度（右）の記録状況の比較

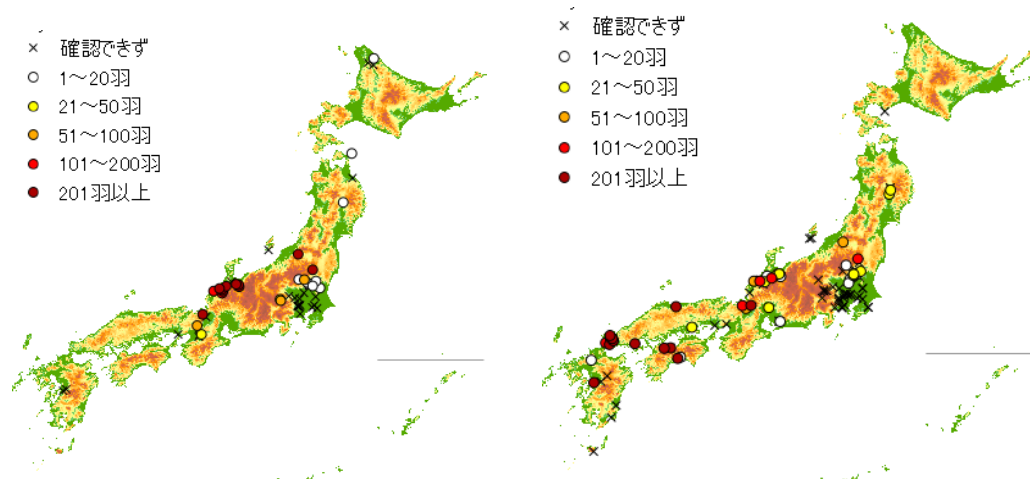


図4. 2011年度のアトリの記録状況（左）と2012年度（右）の記録状況の比較

・マヒワ

まず，記録件数の多かったマヒワは，個体数ランク別の記録状況をみると，1～20羽の小さな群れが全体の45%で，次の21～50羽の群れも含めると全体の約80%近くを占めました。一方，201羽以上の大きな群れは1件もありませんでした。



次に、便宜的に日本を大きく3つの地域に分けて、記録件数の多かった2010年冬と今冬の様子を地域別に比較してみました(図5)。すると、今冬の関東地方や東北地方ではほかの2地域より情報件数が多いものの、記録された個体数ランクは全体的に低く、100羽以下の群れが記録されただけでした。2010年の冬には201羽以上の群れも約10%あったことから、この地域では個体数が少なかったと言えそうです。また、近畿地方や北陸・信越地方などでは、2010年では記録件数が多い一方で50羽以下の割合が全体の75%を占めていました。ところが、今冬は201羽以上の大きな群れこそ記録されませんでした。51羽以上のやや大きな群れが全体の37%と2010年冬より少し多い傾向がありました。さらに、今冬の四国や中国地方、九州地方では2010年より多く情報が寄せられ、かつ個体数ランクも関東以北より大きめの群れが記録されました。これらのことから、今冬のマヒワは、あまり大きな群れは記録されませんでした。全国的に飛来し、関東以北より西日本に多い傾向があったと言えます。

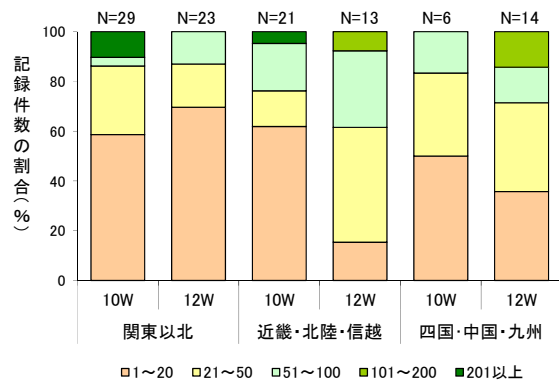


図5. 2010年冬と2012年冬のマヒワの記録件数の地域別割合。棒グラフの上の数字は記録件数を表す。図4以降も同じ

・アトリ

今冬に最多記録数を更新したアトリは、個体数ランクで最も多かったのはやはり1~20羽で全体の約29%でしたが、次いで21~50羽と201羽以上がそれぞれ24%あり、1,000羽や10,000羽もの大きな群れも記録されました。そのため、個体数の上からも今冬は当たり年と言えそうです。昨年は冬鳥が少ないとの話題で持ちきりでしたが、この冬鳥ウォッチのアトリだけは多く記録され、個体数も5,000羽など大きな群れも記録されました。そこで、昨冬と今冬の群れの大きさをマヒワと同じように日本を大きく3つに分けて比較してみました(図6)。まず、2011年冬は大きな群れが秋口から報告されていましたが、地域別にみると関東や北陸地方、信越地方に201羽以上の群れが多く記録されたことが見てとれます。その一方で、四国・中国地方や九州地方からは記録が得られませんでした。ところが、今冬では、関東以北では101羽以上の群れは1件あるだけでした。北陸地方や信越地方、近畿地方でも関東以北よりは大きな群れが記録されましたが、201羽以上の群れは1件のみで、昨冬と比べると雲泥の差です。しかし、中国・四国、九州地方では101~200羽のランクも含めると、この地域の70%以上は大きな群れが占めていました。愛媛県では前述の10,000羽を超える群れや九州では1,000羽前後の群れが記録されています。こうした大きな群れは複数の方によって複数の地域から報告いただきました。



愛媛で越冬したアトリの大群(撮影:十亀茂樹氏)

したがって、今冬と昨冬ではアトリの越冬分布がやや異なり、今冬はさらに西側の地域に多かったと言えそうです。なお、2008年の冬もアトリが多く、九州地方で10,000羽もの記録が報告されました。今冬は、どちらかというとも2008年の冬に近い生息状況だったと考えられます。ただ、2008年の冬は関東地方などにも500羽前後の群れが記録されていました。また、2008年では東京などの市街地の公園などでも群れが記録されました。今冬は市街地での記録がほとんどありません。そのため、今冬は2008年とも少し違っていたかもしれません。

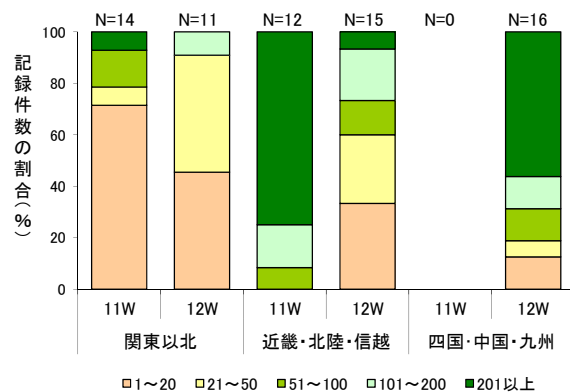


図 6. 2011年冬と2012年冬のアトリの記録件数の地域別割合

・カワラヒワとカシラダカ

毎年、記録件数の多いカワラヒワですが、全体の情報件数が多かったこともあり今冬も63件と最多記録を更新しました。図7は07年冬からの個体数ランク別の割合を示したものです。これをみると、今冬は1~20羽の群れの割合が41%と今までの冬より少ない一方で、51羽以上のやや大きな群れが多く記録されました。特に、201羽以上の群れが約8%あり、2,000羽以上の群れも記録されました。

一方、マヒワやアトリと同じように大まかな地域別の記録状況をみると、今冬のカワラヒワは、関東以北や西日本では大きな群れの割合が多いことがわかりました(図8)。特に、四国・中国・九州地方では、101羽以上の大きな群れの割合は31%となり、関東以北で割合の多い20羽以下の群れの割合より多くなっていました。前出の2,000羽以上の群れも四国地方で記録されたものです。一方で、近畿地方から北陸・信越地方では、記録件数が少なく、個体数ランクでも101羽以上の群れは記録されませんでした。北陸地方の記録は山沿いの調査地が多いため、近畿地方や東海地方などの平野部の農耕地からの情報が集まると、もう少し違った結果になっていたかもしれません。

カシラダカは、記録件数が36件と例年よりやや多いものの、2007年から2009年とほぼ同じレベルでした。ただ、個体数ランクでは記録件数のほぼ同じ2007年から2009年までと比較すると、20羽以下の小さな群れの割合がやや少ない一方で、51~100羽のやや大きな群れの割合が増えました。201羽以上の大きな群れこそ記録されなかったものの、カシラダカの渡来数も多かったのかもしれません。調査地数の上では関東以北と中国・四国・九州地方でさほど違いがないにもかかわらず、地域別の記録件数は関東以北から多く得られました(図8)。この違いが本種の日本における越冬分布の偏りによるものなのか、それとも単に個々の調査地の環境の違いによるものなのか気になります。カシラダカは広々とした農耕地だけが広がる場所より、林縁の農地や草むらを選好する傾向があります。もし、今回西日本の調査地の多くが農耕地の広がる環境とすると、カシラダカの記録も少なくなるのではないかと思います。現時点では、どちらの理由によるものかはわかりませんが、

さらに多くの記録が集まり長年継続して調査することで、本種の日本における越冬分布の状況がもう少しはっきりすると思われれます。

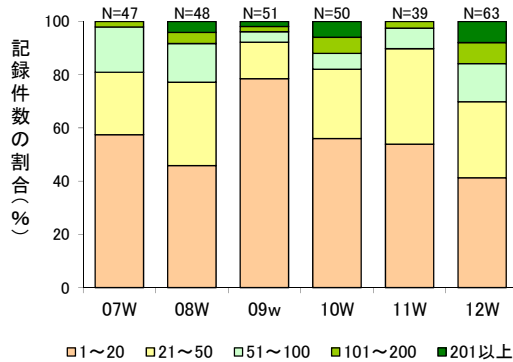


図 7. カワラヒワの記録状況の推移

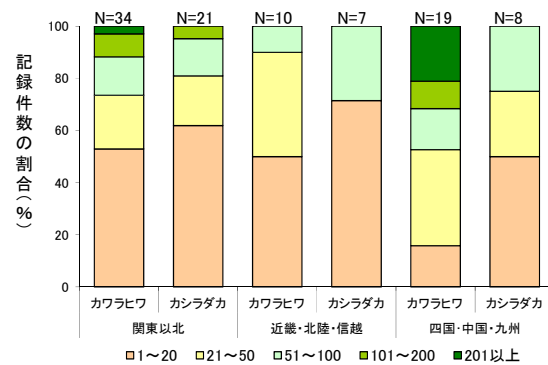


図 8. 2012年冬のカワラヒワとカシラダカの地域別の群れの大きさの比較

・ハギマシコとイスカ

ハギマシコとイスカは、今年も他の4種と比べると記録件数が著しく少ないままでした。イスカは、千葉県と山梨県、富山県から各1例で、個体数ランクもすべて1~20羽でした。

一方、ハギマシコは16例あり、多く(12例)は50羽以下の小さな群れでしたが、101~200羽と201羽以上の大きな群れも各1例ずつ記録されました。ハギマシコも2010年ほどではありませんが、今冬はやや当たり年と言えるのではないのでしょうか。

まとめ

以上のように、今冬は調査対象種の冬鳥たちは当たり年だったと言えます。そして、今冬のアトリやカワラヒワ、マヒワは北日本より四国や中国地方、九州地方などで多い傾向にありました。こうした傾向は、バードリサーチが別に実施しているアンケートによる冬鳥調査の結果からも見てとれます。残念ながら、こうした生息状況がどのような要因によるのかわかりません。ただ、記録数の多い年のアトリやマヒワでは、東北地方や北海道など北の地域の降雪が始まる前の10月から情報が寄せられています。ですので、渡来数の多さは少なくとも国内の積雪量が直接影響している可能性は少ないようです。越冬地への飛来数の多さは、繁殖地での繁殖成績の良し悪しに影響されるとの報告があります(Newton 2006)。そのため、これらの鳥たちでは昨夏の繁殖成績が良かった可能性があります。それに対して、冬の分布状況は、国内の積雪量や食物となる木の実の豊凶、さらには渡りのコースなども関係しているのかもしれませんが。今冬は、東北地方などの日本海側や北海道では例年より積雪が多く、寒さも厳しかったことがニュースなどで頻繁に報道されました。そのため、雪の少ない四国や中国地方、九州地方で多く越冬したのではないのでしょうか。

さて、冬鳥ウォッチも今冬で7年目です。毎年冬鳥たちの飛来状況をまとめていて、マヒワとアトリの生息状況の傾向がある程度みえてきました。それは、アトリとマヒワでは同じアトリ科に分類されるのに多い年と少ない年の変動が必ずしも一致しないことと、ア

トリとマヒワの個体数の変動の違いが挙げられます。渡来状況が一致しないのは、両種の繁殖分布が異なっていることがその理由かもしれません。アトリのほうがマヒワより高緯度地方で繁殖しています。そのため、気象条件もマヒワの生息地と違うことが考えられます。一方、変動の大きさですが、マヒワは2010年の冬にはほぼ全国的に多かったものの、2011年冬にはわずか4件の情報でしかも個体数ランクが1~20羽と著しく少ないものでした。ところが、今冬では再び情報件数が多くなり、2010年冬と比べるとあまり大きな群れは記録されませんでしたでしたが全国的に飛来しました。これに対しアトリは、大きな群れが記録される地域が年によって九州地方や四国・中国地方だったり、北陸地方や中部地方、関東だったりと違いますが、毎年のように日本のどこかで大きな群れが記録されました。これらのことから、マヒワはアトリより飛来数の変動が大きいと言えます。こうした2種の違いは、彼らの食性の違いによるのかもしれませんが。アトリの繁殖期の食性は昆虫類、特に蛾の幼虫です。そのため、北欧の営巣地では蛾の幼虫の発生と繁殖成績が密接に関わっているとの報告があります(Hogstad 2000)。一方、マヒワは、繁殖期でも植物、特にマツ類の種子を主食とします。そのため、マヒワではトウヒなどの樹木の種子の豊作地を求めて広い範囲を放浪することが知られています。時には、同じ個体が前年の繁殖地から3200 kmも離れた場所で繁殖した事例が報告されています(Newton 2006)。日本へやってくるマヒワもこのように年によって繁殖地を替えているのかもしれませんが。こうした冬鳥たちの飛来状況を目の当たりにして、冬鳥のモニタリングにさらに興味が沸いてきました。

来年の冬はマヒワやアトリ、ハギマシコ、イスカたちの渡来状況はどうなのでしょう。今冬、再び記録されたイスカはさらに大きな群れが観察されるのでしょうか。今から楽しみです。もし、これらの鳥たちが観察されなくとも、カワラヒワやカシラダカだけでも結構です。さらに、記録がなかったという情報でも結構です。前述のようにカワラヒワやカシラダカの日本における生息分布や個体数の偏りなどもほとんどわかっていません。これらを解明する上でも多くの参加者の皆さんの協力が不可欠です。ぜひ引き続き来年もご参加いただければ幸いです。さらに、今冬記録の少なかった地域の皆さんのなかに、もし2012年冬の12月から2月までの情報をお持ちでしたら、これからでも結構ですので情報をお送りいただければ嬉しい限りです。今回の集計には間に合いませんが、来年の報告書で修正してご報告したいと思います。

なお、末尾ながら2012年冬の調査にご協力いただきました皆様、写真を提供いただいた皆様のご芳名を記してお礼にかえさせていただきます。調査協力者：赤塚隆幸、荒木廣治、石塚文信、石濱徹、井上賢三郎、井上将英、井上幹男、今森達也、植田睦之、上田平安、内田博、大出水幹男、大塚啓子、大淵真紀、梶本恭子、加藤ななえ、河合恵美子、木村有紀、黒沢令子、小林俊子、小松周一、齋藤映樹、鹿間信弘、清水敏弘、白石ひとみ、鈴木ゆう、高橋邦年、多田英行、田中正晴、日本野鳥の会熊本県支部、野中純、濱伸二郎、平野敏明、藤江昌代、藤波不二雄、松永紀代子、三上かつら、宮本桂、守屋年史、湯浅芳彦、吉井文吾、渡辺美郎、渡部通、写真提供者：大塚啓子、白石ひとみ、十亀茂樹

【取りまとめ：平野敏明】

引用文献

- Hogstad O. 2000. Fluctuation of a breeding population of Brambling *Fringilla montifringilla* during 33 years in a subalpine birch forest. *Ornis Fennica* 77: 97-103.
Newton I. 2006. Advances in the study of irruptive migration. *Ardea* 94(3): 433-460.